

近事

□本號口繪はワットマン九ツ切のスケッチにして去年文部省展覽會出品『穂高山の麓』の原圖に候

□次號には戸張孤雁氏の『コンホジション』説明圖を添へて委しく講話さるべく、山本鼎氏の『版のなぐさみ』はエツチングについて詳説さるべく候

□夏期講習會場は奈良と決定致候同公園は千年の古都の面影残り居り樹木に富み建築に彫刻に寫生の材料は極めて豊かに御座候
□されば初歩の人或は戸外寫生を望まぬ人には時々靜物寫生を試み可申候へ共出來るだけ戸外に於て實習致させ候方針に御座候
□宿舎其他の都合も有之候間出席希望の方は一日も早く御申込有之度候

□奈良には完全なる彩料店無之候開期中入用の品は取纏め東京又は京都より取寄せ方取計ひ可申筈に候得共差當り入用のものは御用意ありたく候

□出席者にして新に寫生用具を求むる方には文房堂割引券を進呈可致候に付返信料を添へて御申出ありたく候

△日本水彩畫會五月例會は、月の二十四日研究所に於て開會、午前は大下講師の『繪畫展覽會を見るの心得』といふ講話及、眞野講師の透視畫法講義あり、午後は成績品の批評あり、出品百五十余點、一等赤城泰舒氏の『森』、二等佐藤量氏の『牛込見附』三等水野以文氏の『靜流』にして何れも賞あり、次にデツサンは、佐藤量氏及水野以文氏優劣なく賞品を二分せり。
△全研究所にては生徒の作品四十餘點を太平洋畫會展覽會へ出品したり。
△同研究所は七月二十七日より九月十日迄夏期休業をなすべく、其間の事務は一切春鳥會にて取扱ふべし
△太平洋畫會展覽會は盛況のうちに六月十四日閉會したり

紹介

◎藝術界 七月の卷
發刊の辭に曰く『藝術界は一部の月刊雜誌として廣く凡ての藝術を網羅しその進歩發

達を扶植することを目的とす、苟も藝術と稱する範圍に入るべきものは悉く此の目的に資せらるべきものとす。東西古今の既製藝術の研究は勿論、その種類を問はずその綱目を分たず一切を含めて一般社會に藝術の何たるかを示さんとするなり。黨せず興せざる是れ此の雜誌の起因なり、目的なり云々畫家に岡精一氏、彫刻家に荻原守衛氏挿畫家に戸張孤雁氏、文士に宮澤白榆氏、建築家に酒井祐之助ありて各専門方面に筆を執られ、小川三明氏も其編輯を助けらるゝといふ(一部十五錢、芝車町八十三、藝術社)

◎ロビンソン漂流記(通週俗文庫第六編)
百島操氏の抄譯にして此有名なる物語りの内容を窺ふことを得べく譯文簡にして要を得たり(四六版八〇頁、定價二十錢、東京駒込内外出版協會)

◎女性と趣味 丸山晚霞著
再版漸く成れり、初版に比して表裝華美に過ぎ不調和の觀を呈せしは惜むべし(定價貳圓、小石川久堅町日本葉書會)